

図 書 室

昭和53年度大学図書館実態調査によれば、生研の蔵書数は123,113冊におよび、規模として自然科学系附置研究所中最大である。一方、購入洋雑誌の種類は宇航研の453種について413種で附置研中第2位に当たる。比較のためこれに対応する工学部全体の数字をあげれば1,343種である。特に生研図書室所蔵の外国雑誌バックナンバーは、他の多くの図書館にしばしば見られる戦中および戦争直後の混乱期の欠落が非常に少ないことで知られている。これは戦後のある時点で積極的にバックナンバーを補充した諸先輩の努力によるものである。

この図書室の運営は各研究部の教官より選出された委員によって構成される図書委員会(委員長ほか委員10名)の指揮監督の下に、現在掛長以下7名の職員によって行われている。図書委員会の機能は図書予算の作成、図書利用規定の作成および改訂、図書分類法の制定、購入図書雑誌の選定等図書行政の広い分野にわたっている。

図書室関係が占める建物延面積を表1に示す。

表1 図書室占有面積

麻 布 地 区	閱 覧 室	68.75m ²
	書 庫	521.00m ²
	準 務 室	19.50m ² 45.50m ²
	計	654.75m ²
西 千 葉 地 区	保 存 書 庫	90.00m ²

この数字自体はやはり附置研究所中、宇航研について第2位の広さであるが、蔵書数対書庫スペースという比を算出してみると、その順位はかなり低下する。急激に増大する図書、雑誌に対してどのようにして書庫スペースを確保するかは、単に生研のみでなく大学全体すべての部局を通じての大きな問題である。特に生研の場合は43年度末に西千葉に保存書庫が設置されたが、その不燃建築化は今後の課題として残されている。

次に外国雑誌の購入価格の高騰と新しく発行される雑誌の種類急増の問題がある。一例として Chemical Abstracts の最近10年間の価格推移を表2に示す。

表2 Chemical Abstracts の価格変化(円)

昭和43年度	455,800	昭和49年度	796,100
44	455,800	50	912,000
45	630,800	51	1,154,055
46	622,100	52	1,140,000
47	761,600	53	1,212,000
48	687,000	54	920,000

注 53, 54年度は Air Cargo, その他は Sea Mail.

ここに Chemical Abstracts を選んだ理由は単にひとつの代表的外国雑誌ということにとどまり他意はないのであるが、他の一般の雑誌もほとんど同様な価格の推移をたどったと考えてよい。この表によって従来から漸増の傾向にあった価格が、いわゆる石油ショックを契機として急騰に転じ、その後円高ドル安という外国為替市場の動向を反映して一種の平衡状態を保っていることがみられる。国立大学における外国雑誌購入価格決定に関与する複雑なメカニズムの中で寡占というよりはむしろ独占に近い洋書輸入業者と執拗な negotiation を繰り返す事務当局、あるいは公正取引委員会の努力などがあって一部の雑誌では近年その価格に若干の低下傾向がみられるが、この趨勢が将来まで続くとは到底考えられない。

外国雑誌購入価格の変動に対し、ここ数年間図書委員会は苦慮を重ねてきたが、けっきょく購入雑誌タイトル数の減少という解決策をとらざるを得なかった。この間の状況は表3に示されている。

表3 購入外国雑誌タイトル数の変化

年 度	43	44	45	46	47	48	49	50	51	52
図 書 室	285	289	299	304	312	303	301	295	268	229
研 究 部	196	208	196	197	192	183	193	199	189	184
計	481	497	495	501	504	486	494	494	457	413

この表によれば図書室購入雑誌のタイトル数は石油ショック直前に記録した312種を最高にその後減少の一途をたどり、52年にはその27%減の229種となった。研究部購入の雑誌にはこの図書室購入分の減少を compensate する傾向が強かったが、それでも最高197種から184種へ約7%の減少を示している。この間新規に発行される学術雑誌の購入希望も強かったが、その要望に応える余裕はほとんどなかった。

激変する内外の情勢に対応し、しかも増大する大学院学生、研究生等の応接、さらには相互利用のための事務量の増加に対処する図書掛職員数は、昭和43年の11人から昭和51年には約4割減の7人まで削減されている。

今後いわゆる安定成長下の厳しい条件のもとで図書室は多くの問題を処理していかなくてはならない。基本的には、単に量的な拡大よりも質的な充実を目指すことが、かつて草深い西千葉の地にありながら貴重な文献を蒐集し、今日の生研図書室の基礎をつくられた諸先輩の労に報いる道であると考えられる。(小倉磐夫記)